

---

# 一緒にトリップ！

幸町

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一緒にトリップ！

### 【Nコード】

N9465S

### 【作者名】

幸町

### 【あらすじ】

学校の帰り道、コンビニのフライドチキンを買って食いついて、調子に乗って鼻歌交じりで歩いていたら、いつの間にか森の中。異世界トリップ。何故か何度もトリップするはめになるあたしだけど、そのたびに同じ男に会う……ってこれってどういうこと？もしかして仕組まれてる？？更新は気まぐれですが、宜しくお願いしますm

（ ） m

## 結 末（前書き）

短編のつもりでしたが、思ったより長くなってしまったという……  
なので、淡々としているのはそのせいです。

## 結 末

恋は盲目、ハート型。

脳は花畑、バラ色人生。

今のこの男を表現するなら、きっと、いや絶対そうだろう。

反してあたしはそんな男を見てヒいている。

そして人生どんぞこっていったところ。

「ああ、やはりあなたは、わたしの運命のひとつですね……」

さあ今すぐにも婚約・結婚、いえもういつそ身を結びましょう！

そう言つて暴走する派手派手しい金と白の軍服を着ている妙にキレイなその男が、あたしを、いわゆるお姫様抱っこして、どこかしらへ連れて行くこととする。

「ちよっ、何でそうなるんですか！！」

ていうか、

展 開 が 早 す ぎ や し ま せ ん か ？

いくらキレイな男とはいえ理不尽なその物言いに納得がいかない。

いやそれより何より、そんな展開なんて望んでもいないし！！

顔をばしばし叩いたり胸をどんどんと殴ったり、足をばたばた蹴ってみたり。

暴れまわってみるけれど、がちり押さえつけられているために、足は未だに地をつかずに逃げずじまい。

ようやく下ろされたと思えば、ベッドの上だった。

「大人しくして」

にっこり笑うけど、何か悪たくみを考えてそうな顔つき。

逃げようとすれば、ちゅー。

両手が掴まり、気づけば押し倒されてる。

何度も抵抗して暴れているのに、ずっとちゅー。

「あなたはまだ頭では認めていないようだけれど」

息絶え絶えなあたしを見つめる男は、目を細めて優しく微笑む。

「いくつの世界でも、どんな理由でさえも、あなたとわたし、巡り合えたでしょう?」

これを運命として何とよびますか。

男は浪漫めいた口説きを耳元で甘くあまく囁いた。

そんなのもう、呪いってやつじゃない？

無理矢理にもほどがあるよ。

男を一睨み、あたしは男の首を、それも思いつきりかんでやる。

なのに男は、くしゃりと顔を歪んで笑うのだ。

ああくやしい。

## 出会い

今思えば最初のトリップはこんな感じ。

その日、なんとなくコンビニのフライドチキンが食べたかった。

学校帰りに新商品のお菓子いくつかと兄妹分のフライドチキン、それからミルクティーの500mlペットボトルをふたつ買った。

学校から自転車30分・徒歩1時間な我が家へと続く道は、多くの車は通るけれども人は通らない。

そういうことをあまり気にせず、フライドチキンひとつつまみ食い（もうすでにお腹が空いていた）、調子に乗ってふんふん鼻歌交じりで歩いていたら……はい、別世界。

普通に歩いてトリップしたものだから、状況がわからなかった。

当然、頭はクエスチョンマーク。

とりあえずフライドチキンを食べ終える。

？

はて。

いくら田舎とはいえ、住宅地。

コンクリートの道を歩いていたはずだったのが、いつのまに生い茂った森にいるんだろう。

前後左右、あたりを見渡して森。

何でこうなったのかわからず、とりあえず叫んでみる。

言葉の意味もない驚愕。

多くのカラスらしきものが、あたしのその叫びのせいで、カアカア鳴きながら逃げ飛んだことを、未だに覚えている。

初めはまだどこか瞬間移動したのかなあと、いとこの兄ちゃんが持っている漫画を思い出しながら、なんでかわかんないけど、すごい体験したなあと前向きな考え方だった。

というか余裕ぶっこいてた。

瞬間移動だったら言葉はわからずとも、どうにかしてお金貯めたり、親に連絡すればなんとかなるよね！と頭にちらりとよぎっていた部分があつたからだ。

けれど、瞬間移動も何もそうじゃないと気付いたのは、植物を始め昆虫や動物が見たこともない色やカタチをしていたのを目にしてしまったせい。

ああ、どうやって帰ったらいいんだろうと落ち込んだのはいうまでもなく。ぐちぐち。



一週間で森を抜けだし、途中羊と犬を掛け合わせた、小さい動物になつかれ助けられて。

近くの村の人を発見すると、その人は狂喜乱舞。

後で聞くと、その動物は異世界の案内人（動物？）とのことで、動物を見るなやいなや異世界人だとわかったらしい。

その世界は、異世界と行き来は当たり前だという世界だった。

よくわからないまま連れて行かれ、後に幸いにも保護者がわりとなる領主のおじさんと出会う。

後々のことを思い出すと、1回目の異世界はそのおじさん夫婦と村の人たちが親切で、ひどく恵まれていたのではないかと思う。

最初言葉はわからず大分聞き取れるようになってはきたけれど、たぶん未だにあの言葉は片言かもしれない。

ときどき、笑われることもあったしなあ……。

しばらく領主のお手伝いをしながら、生活。

もうすぐ1年になるだろうな、というときに国の政治指南役とその団体が訪問。

それがあの男、リユーオーとの出会い。

リユーオーはどう思ったのかわからないけれど、あたしは、偶然芸

能人を見たときのような感覚だった。

わーイケメンだーなんて、意外と面食いだったんだなあと自身に苦笑しながら、そのときは紳士的なひとだと印象を受け、お客様としてみていた。

次元というんだか、世界というんだか、そういったものを、まさか超えて何度とも逢うなどと思うはずもなく。

3泊リ्यूオー率いる団体が滞在していたところで、あたしはどろん。

それは床が水になったような感覚だった。

勢いよく水中にとびこんだ感じで、あたしは水にどぷりと落ち沈む。

仄暗い底は、蛍のような淡い光からやがてまぶしい光を放ち、そうしてまたいつのまにかトリップしたのだった。

## 名前（前書き）

ようやく主人公の名前をだせました笑

## 名前

1度目のトリップは中世ヨーロッパ、R・P・G風といえば、2度目は現代ファンタジーといったところ。

魔法が使える世界だ。

都会みたいだったけれど、言葉は懐かしの方言だった。

通貨は、紙幣の人物がなぜかサムライだったということを除けば硬貨はあまり変わらない。

それと変わっているといえば、子供とお年寄り以外は、力の気と書いてリキギなる魔力（許可制）によって空を飛んでいるということか。

目のあたりにして、少年と宇宙人が自転車使って空を飛んでいる映画の名シーンと、魔法使いの生徒たちが車を運転してたシーンを思い浮かんだのは、仕方がないかもしれない。

「それ」以外は、元々住んでいた世界と変わりがないから抵抗なく受け入れられたけれど、「それ」があまりにもぶっ飛んでいるから、やっぱり慣れるのに苦労した。

あたしがトリップして、まず目に飛び込んできたのは、高校生ぐらいの男子だった。

実際は中学生で年下だったけれど、やたらと背が大きいし、ものす

ごく偉そうで態度もでかかったために、そう思っていただけだ。

開口一番、奴は言った。

「アクマ、俺と契約しろ」

はい？

悪魔？？

トリップしたということはすでに理解できている。

けれど、やはり状況はわからないので、あたしは混乱しているままだった。

というか、人に向かって悪魔はないだろう悪魔は。

「おい、返事くらいせえ」

「え……いや何、何故、どういことですか？？」

奴はため息をついて、あたしを指さして横を見る。

「先生、これどうすればいいの？」

よくよく周りを見渡せば、体育館のようなところで、あたしを中心に、奴と先生らしき人物を先頭に、それを囲うように多くの男女と様々な動物がちらほらと集まっていた。

後に聞いたが、そこは実習室で本当の体育館はその倍ある。学校の

土地、半端ない。

「そうですね……人型を召喚できたことは大変素晴らしいですが」

先生は、あたしを見やると、につこり笑って、あたしを呼ぶ。

人型も何も、あたし人間なだけれどなあ。

「君、召喚紋（魔法陣のことらしい）の外、出ることができますか？」

何のことだかわからず、多少動きづらいものの円陣の外へ出てみる。

すると奴は、「うあああああ！」と雄たけびを上げた。

怖。

いや、なんだか悔しそう??

「とても惜しいですよ、皆川くん。本来ならば拘束、意思操作も兼ねる召喚紋が、逆にこれではアクマに反撃をくらうことになるでしょう」

ちなみに皆川くんという奴は、円陣と内容はちゃんと書けたが、その中身の紋を雑に書いてしまったために効果が得られなかったとのこと。

あたしを呼びだし牢屋に入れさせたことはできたけど、鍵をかけなかったために結果あたしは逃げる事ができた、というわけだ。

「先生、万が一そうなった場合どうすればいいですか」

真面目そうな女子が手をあげて、質問をする。

「そうならないように召喚紋は丁寧を書くことと教えたはずですが……いい機会ですのでお見せしましょう」

そう先生は苦笑して、あたしを見ながら、手をいくつかの形に組み替える。

「いずれ習うことになりますが、これは上級編ですので補足程度にとらえていただければ幸いです」

忍者が何かの術をやるみたいだなあとぼんやり思っていると、小さな円陣が急に現れ光りだし、あたしを囲んだ。

「名前を伺っても？」

ばかに丁寧なのに、それは命令のようだった。

何か言葉を発しようとしたけれど、それは結局名前にしかならず、抵抗もむなしく全て言ってしまう。

「まき、む……ら……はな……き」

「契約者・竜央、アクマ・牧村花姫、これより契りを結ぶ」

先生が言つなや否や、囲まれた光は周囲に風と共に放たれる。

リユーオーなんて政治指南役のお客様の名前が聞けるって、すごい

偶然だな。

そんなことを思いながら、あたしは気絶した。



## 目覚め（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

拙い文章ですが、ゆるりと御覧下さいませ。

## 目覚め

結論から言うと、先生は一回目の異世界のリ्यूオーだった。

ただ何で気づけなかったのかというと、幾分年を重ねていたようだったし、何よりあまりリ्यूオーを見なかったというのもある。

同じ名前を偶然聞いたなあと思うだけで、二度目の異世界トリップ……バロック調の屋敷から体育館のようなところにいきなり行ったんだ、トリップいわずして何と言う！……で、まさか同じ人物だとは思わないだろう。

さてさて気絶したとはいえ若干寝ていたということもあり（変な夢を見ていた）、あたしはすぐに目覚めることはない。

春眠曉を覚えず、と中国の詩人は言ったけれど、あたしは年中曉を覚えず。

ぼんやりまどろんで、ごろごろする。

たまらない、しあわせ。

……たまに二度寝をやらかしてお母さんに怒られるけれどねーなんて、思ったところで気づく。

最初に違和感を感じたのは、匂いだった。覚醒。

女の子のほわほわした感じじゃなくって、男！って断言する匂い。

お父さんや兄ちゃんのきつい香水より断然いいかも、なんて目を開けた。

大きなベット。

広い部屋。

新聞で、ときたまあるマンションの広告のような配置でおかれた家具や電化製品（全く生活感がない）。

「う、うわああッ！」

びっくりして慌てて思わず叫ぶ。

ここどこですか！！

混乱しているために、トリップして云々と今まで過去のできことを思い出す。

最終的に自分自身が、どこに住んでた誰それで、家族は何人で、どの高校に通っていた何歳ということを確認するかのように思い出し。

そういえば皆川くとやらに「悪魔」と呼ばれて先生が何かしましたね、と思いだしてだんだん腹が立ったところで、見計らったかのように丁度よくドアが開いた。

「ああ、起きたようですね」

低い声の主は、あたしに何かした先生……もといリ्यूオーだった。

このときはまだリユーオーだとは思わなかったため、力ある？親切  
そうな先生という印象。

「……体は大丈夫ですか？」

何ともないので頷いた。

リユーオーは、ほっとした様子で胸をなでおろす。

微笑み、あたしに言った。

「とりあえず食事をしましょう、食べながら話をしますから」

## アクマ

食事をしながら、この世界について話してくれた。

それからアクマについてのこと。

召喚した獣や使役いわゆる人型の使い魔のことを、そうひっくり返してアクマと呼ぶそう。

「ここでは肯定的な意味として捉えるので、あしからず気にしないでください」

ただ単に言葉や意味といったモノがなく、あてはめたモノがたまにその単語になってしまったとのこと。

アクマは本来ならば召喚した人が主人となるけれど、あたしは皆川くんという生徒が失敗したため、特別に先生、もといリユーオーがあたしの主人となるらしい。

何でもそのクラスでは、まだ習っていない高度な術だったとか。

リユーオー以外召喚紋から、外に出たあたしをアクマにすることができなかったとか。

そんなこんな、なんやかんやな理由があつて、とにかくあたしは、リユーオーのアクマ、ということらしい。

主人とか、アクマとか……なんか納得できないけれど。

「今は納得できずとも、もし皆川くんが技術があつたとしたら、危うく皆川くんのアクマになっていたところでしたよ」

もし皆川くんのアクマになっていたら。

リユーオーのアクマと、どう違うのだろう。

リユーオーのその言葉に、あたしは、アクマがそもそも何をする存在なのだろうと疑問をもち、首をかしげた。

あたしがわからないと判断したのか、アクマについて簡単に説明する。

「基本は隷従ですが近年では愛玩用動物とされていますね。獣よりも人型のほうが力は劣るものの優れた能力があるということもあり、貴重な存在として扱われています。人型のアクマと契約することができる人間は尊敬の念を向けられますが……好色な目で見られることが多いかもしれません」

中学生の男子ですからねえ、命令に背くことがない思いがままの異性と二人つきりとなったらどうなるでしょうね。

好色の意味がこの時はわからなかったけれど、後から続く言葉と、くすくす笑うリユーオーにぞっとした。

笑う場面じゃないだろうに。

この男、怖い。

「ああ、わたしですか？あなたは、恋愛対象ではないので大丈夫で

すよ  
「

そういうイロコイの意味で見えてはいないのにもかかわらず、彼はさ  
らりと言つてのける。

「……まあ、この世界で、たまたま主従関係だったという話ですか  
ら、しばしの辛抱です。もちつもたれつ、そのうち帳消しとなりま  
す」

んん？

思わず眉を曇らせた。

「どついつことですか？」

食後の紅茶を優雅に飲みながら、にっこりとリユーオーは笑う。

「それはおいおい。この世界について教えましたが、ここから本題  
です」

「本題……ですか」

「ええ、単刀直入に言います。花姫、あなたは世界から世界へと移  
動することは、何度目でしょうか」

え、と口をぽかんと開けるあたしをよそに、リユーオーは淡々と、  
自分の状況を話す。

……本当にいきなりですね？

## 独 白（前書き）

ご覧いただき、またお気に入り登録していただきまして、ありがとうございます。

注意点として前書きをば書きました。

サブタイトル通り、今回は2人の会話からリユーオーの部分だけ抜き取ったというような、変わった文章の仕上がりとなりました。

申し訳ありませんが、それをふまえたうえでご覧下さいませ。

引き続き、宜しくお願いします。



## 独 白

わたしは8回ほど、世界から世界へと渡っています。

12歳頃を皮切りに、転々と世界を移動してきました。

この世界では20の頃から住んでいて、珍しく長い滞在です。

……旅行感覚で言うな？

いえ慣れてしまえば、そう思いますよ。

ときには3日で異世界へ行く、なんていうことがざらでしたから。

ただ渡った直前は未だに慣れないものです。

例えば今の世界であれば、わたしは学生ということになっていました。

周りが当たり前のように自分と関わりを持っているような振る舞いをしていたものですから、戸惑い、驚きました。

見知らぬ方々が、わたしを知っているということに、今ではよくし  
ていただいて大変失礼だと思いますが、当時はひどく気持ち悪さを  
覚えたものです。

それ以外は何不自由なく、郷に入っては郷に従えといいますが、そ  
のまま勉学を励み、わたしは教師となりました。

そこであなたと出会ったのです。

予想していたとはいえ、まさかあなたがアクマとなり、わたしと契約をするなどということになるなんて、思いもよりませんでした。が、  
すいません、つい思い出し笑いを。

……ええ。幼い頃、わたしは奴隷だったところを、あなたに助けられたものですから。

今はわからずとも礼を言わせてください。あのときは、ありがとうございます。  
ございました。

話を変えますが、花姫は今、何度世界を、あなたの言葉でいうと『とりつぷ』しているのでしょうか？

……そうですか、2度目。

やはりお互いてんでんばらばらに、世界を渡る回数が違うようです  
ね。

……ええ、そうです。

あなたとわたし、何度となく必ず会うことになるんですよ。

花姫と、馴れ馴れしくつい呼んでしまうのは、そのせいです。

なるべく気をつけますが……そうですか？いえ、ありがとうございます。

これから先、過去のわたしも、またもしかしたら未来のわたしも、あなたは会うことになるでしょう。

そのときは宜しく願いますね。

……あの頃と逆の立場だと思うと、少し面映ゆい気持ちになります。こついう、ことだったんですね。

8回転々と移動し、花姫とわたしが会えば違う世界へ行く、あなたの年齢はほぼ変わらずといったところまでは、わかりましたが。

あなたとわたしが、移動する原因そのものはわからずじまいです。

……ええ、しかし9度目以降の花姫には会っていないので、もしかしたら、わたしはようやく終わりが近づいているのかもしれない。

え？

どういう世界を渡ってきたか、ですか。

お返しと言ったら、あなたは気を悪くしてしまうでしょうか。

けれど未来の花姫が言ったことですので、わたしもそうさせていただきます。

『知ってしまえば、面白くないでしょう？』

ふふふ、悔しそうで何より。

……ようやく花姫に勝てたような気がします。

ただ、少しばかりわたしが体験した話はできましょう。

未来の花姫もそうでしたし、ね。

それから、この世界についてならいくらでも。

……さて、何から話します？

## 宵越し

……腹立たしい。

にこやかに話すリ्यूーオーの話聞いて、1つの単語あげるとしたら真っ先にこれだろう。

確かに、もし自分の立場であつたと言いつつだと思っただけに、苦々しく感じる。

前半はよかった、よっぽど異世界トリップ堪えているんだなあーと思わせるくらい、物憂げな笑みを浮かべていたものだから。

過去を思い出してから、だんだんと皮肉めいた微笑みに変わったのがいけない。

にこやかという言葉が合う男だとは思つ。

けれども、そこに腹黒といった言葉も垣間見えるとは思つてもみなかった。

……にこやかで、こんなおどろおどろしい意味もあつたかな？

本当、前半はよかったのに。

「昔のわたしも、こうだったかもしれないねえ」

ぶつくさしているあたしを見ながら、リ्यूーオーは独り勝手にくす

くす笑う。

余計に、腹立たしい。

「さて、もう夜も遅くなりましたことすし」

また話は後にしまして、そろそろ寝ましょうか。

夕食前まで寝ていた客室が、しばらくの間あたしの部屋になるらしい。

わたしはあそこで寝ますから、と言って指をさした先はリビング奥の扉。

ほんと、ものすごい広いところに住んでいるな、このひと！

……今更、だけれど。

部屋にある衣服を勝手に使ってもいいらしく、ついでにトイレと浴室の場所も教えてもらう。

「それでは、おやすみなさい」

そう言って、さっさとリユースは自室へと向かう。

扉が閉まる音を聞き、しばらくして、なんとなく虚無感を覚えた。

「お風呂はいつてこよー」

気持ちに疑問を持ちながら、それをかき消すように独り言を呟いた。  
前の世界ではシャワーはあっても風呂の、習慣というか文化がなかった。

久しぶりのお風呂。

他人の家の風呂を好き勝手に堂々使っているなんて、図々しいけれど。

ゆっくり浸かろう。

夢見た念願のお風呂。

あたしはわくわくしながら、そして、浴室に向かったのだった。

## 月夜

翌日、一応はリユーオーのアクマとして付き従った。

多くの人の視線と、声をひそめているんだろうけれど聞こえてくる噂話に辟易した。

このときに空飛ぶ車を初めて見て目が点になる。

なるほど鳩が豆鉄砲を食らったというのはこのことですか、とリユーオーは独り納得して、笑いをこらえながら、とぎれとぎれに呟いた。

ちよっとむっとする、散々な日だった。

3日目、どうやら生徒が授業に集中できないようですと職員室待機。

隣のキレイなおねーさん先生にお菓子をもらい、気づけば熟睡。

起きればリユーオーの顔が近くて驚く。見渡せば小さな倉庫。

何故。

知らないひとに物はもらうなど、初めて聞いた敬語を外した言い方で怒られ、しょぼしょぼ。

落ち込んだ1日。



4日目以降は、自宅待機。

一人で外出禁止令を言い渡される。

何にもないから、お留守番はつまらない。

……夕方、リ्यूオーに会うまで暇だった。

ただいま、おかえりなさい。

言葉のかけあいがなんとなく気恥ずかしくなった日。

5日目、リ्यूオーは休みだという。

その日一日、リキギとはどんなものかと魔法を教えてくれた。

アニメ映画で見た茨姫の3人のおばあちゃん魔女のよう、便利すぎる……。

けれど召喚紋なしに、杖や手で何かを描くかのように手を振るのは高度な技だという。

アクマなあなたもできるはずです、と言われ試しにやってみた。

小さなタンポポひとつ、でてきた。

うわー、あたしでもできるんだーと浮かれてたら、リ्यूオーから一言。

「この世界では、あなたは何もできないようですね」

妙に輝いている笑みが凶器になるなんて、言葉の槍がぐさりと心が傷ついた。

魔法使う能力は、皆無に等しいと気づいた悲しい日。

6日目、たわいない会話で、ふと散歩をしましょうということになり外に出た。

びゅんびゅん空飛ぶ乗り物を、地上で見る。

長い柄の草蓐をまたがって、庭蓐じゃないのが惜しいと思いながら、空を移動する男性には笑った。

一人笑うあたしに、何を理由に笑っているのですかとリユーオーは説明を求める。

空想の話だけど元々住んでいた世界ではベタだったとしゃべると、彼は軽くうなずき、納得したようだった。

わたしにとってみればアレですかねと言って指さした先は、大きな金竜。

驚くあたしを尻目に、リユーオーはどうやって玄関に入るでしょうかねえと遠くに行った竜を見る。

そ　う　い　う　問　題　な　の　？

注目するところはお互い違うけれど、二人で笑いあった。

7日目、その日の夜のことだった。

窓越しよりも直接見たほうがいいと、ベランダのガラス戸を開けて  
大きい満月を見る。

夜風が冷たいけど、その分、月はきれいに映えてると思う。

「花姫？」

「はい、何ですか」

いつのまにか帰ってきたらしい。

リユーオーの声がした方向を見ようと後ろを振り向く。

薄紅色の花びらが舞った気がする。

瞬く間に強い風がきた。

「え？」

お互い思わず相手を凝視し、そして自分を見る。

自分の体が、花びらのごとく散り散りとなって舞い飛んだ。

「どうやら、お別れのようですね」

混乱して、体が消えていく感覚が怖くなって叫びそうなたしとは  
逆に、冷静なリユーオーはぽつりと言った。

何でこう落ち着いているのだろう、あたしは逆上しながら、リユーオーに八つ当たりをする。

きょとした顔の後、リユーオーは何かを察したように微笑んだ。

「無理ありません、わたしはただこの感覚に慣れただけですから」

大丈夫、大丈夫ですよ。

呪文のようにリユーオーは何度もそう言っ、あたしを慰める。

花びらが多く舞うにつれて、体がどんどんなくなっていく。

怖いけど、呑気にも月明かりに照らされ舞う花びらがきれいだと感じた。

「……きれいですね」

彼も同じことを考えていたようだった。

彼の言葉にうなずくと彼は優しく微笑む。

「またお会いしましょう、花姫」

そうして2度目の世界から、あたしは別れた。

## ひとり

2度目のトリップは、とても穏やかに過ごせたのではないかと思う。

リユーオーと長い時間いたのも、このときだけだ。

思えば貴重な時だったのかもしれない。

3度目は半年ほどいた。

昔の中華風といったところで、あたしは小料理店で働く給仕人になつていた。

その世界で、どういう風な人物の、どこの家族のもので、どんな暮らしをしていたのか。

トリップ直後、そんな夢を見ていたような記憶が、一気に駆け巡る。

いまだに夢の続きをしていると、そんな風に思っていた。

リユーオーに再び逢ったのは、小料理店の客として入ってきたときだ。

1度目のときより年下のようで、同い年くらいだと思つような風貌だった。

後で聞いたことだけれど、リユーオーはそのころ友人と旅をしていたとかで、昼食を済ましたら街を出るところだったらしい。

……どこで逢うか、わかったものじゃないですね。

その数日後に、また異世界トリップ。

今度はトイレの扉を開けたら、ようやく見慣れた居間ではなく砂漠。そして何故か扉ごと取っ手を持ったまま、あたしはしばらく一人たたずむしかなかった。

持っていた扉を八つ当たるように投げ捨て（砂漠と真ん中で何をどう使うというのだろう）、着の身着のまま歩いた。

激しい日光。

乾いた空気。

砂埃立つせいか、目が痛いのと喉がいがらっぱい。

大粒の汗が流れる。

水、日陰、涼しいところがほしいと求めても、あたりは砂山ばかりで、どこがどうなのかわからない。

それでも行動を起こさなきゃ人に会うことなんてできないと思って、あたしは歩き続けた。

くらりと目がかすむ。

あー、このまま死んじゃうんだろうなあ。

そんなことを思いながら、砂に氣を取られて膝ががくりと落ちる。

誰かの、怒鳴り声が聞こえた気がした。

## 麒麟

白い鱗がきれいに覆った体にしがみつく。

頬がひんやりと冷たくて気持ちいい。

「そりゃあ、脱水症状になるわ！」

現在、桜色のたてがみがなんとも可愛らしい麒麟によく似た動物に乗ってイマス。

乗っている、というよりも寝そべっているのか。

ぐったりしているあたしは、日光を遮るためといわれて大きな黒い布をかけられている。

暑いのかと思いきや意外と快適だ。

直接肌が日光に当たれば痛いと感じるほど殺人的な暑さだったので、布がありがたく感じる。

ちなみに冒頭の台詞は、その麒麟さんの言葉である。

「何の準備もせず、無防備のまま、砂漠にいるなどと、何を考えるの行動か！！」

麒麟さんは感情が高ぶったときに、ひとつひとつ区切りながらしゃ



べるのが癖らしい。

女の子を思わせる可愛い高い声と風貌とは裏腹に、古風も合わさった軍人気質な喋り方で麒麟さんは声を荒げる。

はい、なぜか只今説教中デス。

あのと、どうやら麒麟さんに助けられたようだった。

最初言葉はわからなかったけれど、乾燥させた果物と、水々しい赤い果実を渡されて食べるように促される。

大丈夫なのかと不安に思いながらも、有無を言わせない目だったので、あたしは勇気をもって食べた。

乾燥させた果物の味はプルーン、これは脱水症状を起こしたときに食べるというものらしい。

そして赤い果実のほうは、缶詰の桃を食べていたのと同じようで味が濃かった。

これは言葉の意思疎通ができるようにするためのものだったらしい。

こんにゃくならぬ、翻訳ももというわけデスネ。

「全く我が家出をしなかったらどうなっていたというのだ……うぬ汝は今頃、死んでいたであろう!!」

うぬ、とはどうやら、あたしのことらしい。

んん、ところでぶつぶつと、小さかった声だったので聞き逃しました、はい？

イエデ??

麒麟さんは説教から、やがて八つ当たりぎみに愚痴をこぼし始めようとしていた。

……ここらへんで終わらせたほうが、いいかもしれない。

「あの、麒麟さん」

「……おい。麒麟などという、どこぞの人が決めた種別名で、我を呼ぶなよ。我には×××という、シュシンが決めた、名前があるのだ!」

シュシンさんというひとをさぞかし慕っているんだろう。

えっへんと満更でもないような態度の様子で、麒麟さんは鼻高々といわんばかりだった。

……高飛車でも可愛い。きゅんとする。

それにしても麒麟さんの名前のときになって、急にぼんやりと伏せられたように聞こえなくなり結局わからずじまいだ。

「すみません、聞こえなくて……何ておっしゃったのか、もう一度お願いします」

「何度聞いても無駄だ、わざとそうさせているのだから」

「……な、なるほど。では何と呼べばいいのですか？」

わざと聞こえなくさせているのはどうしてなのか。

これもわからないけれど、それを聞いたところでまた……無駄なんだろうなあ。

ふむ、と言ってしばらく考えた麒麟さんが答えた。

「ニコ、だ。ニコ様と呼べ」

そう言ってニコは機嫌悪そうに、フンと鼻を鳴らした。

まったくあいつは何を考えてああ我を呼ぶのだと、またぐちぐちと呟く。

ああ、話を反らすことに失敗……。

その後、街に着くまで延々と、ニコの愚痴につきあうはめになるのは、言うまでもない。

## 麒麟（後書き）

お気に入り登録、どうもありがとうございます！

おかげさまで200件超えるだなんて……思ってもみませんでした  
( ^ ^ ; )

中盤は、さらりと書く予定だったにもかかわらず（それこそ1話で  
まとめる予定でした）、話を膨らみすぎてしましまして強烈な脇役  
の登場です。

麒麟とかなんとか、本当だすつもりはなかったのですが……さてさ  
てどうなることやら。

最後に、いつも見ていただきまして感謝感激です。

これからもよろしくおねがいします。

## 事情

ニコの愚痴は、街に着いても留まることを知らない。

今はニコに庶民的な料亭に連れて行かれて、食事中といったところ。

お金を持っていないと言ったにもかかわらず、奢るからとぐいぐい引っ張られ、気づけば椅子に座っていた。

麒麟に奢られるって何なの、この状況……！

遠慮したものの人間風情が私の飯を食えないのかと、酔っ払った才ヤジよろしくとばかりに、ニコはからんだ物言いだ。

あたしは大人しく言う事を聞く。

ていうか。

麒麟……動物？って飲食店に入っていていいものなのか。

ニコは得意げに笑う。

「<sup>うぬ</sup>汝は我を何だと思っているのだ、×××だぞ」

その名前がわからないので、何なのかすらわからないけれど。

麒麟さんだから仕方がない、ということかな？

曰はく、周囲に幻影を見せているのだとかで大丈夫らしい。

「今の我は、人間に見えていることだろうよ」

……あ、やっぱりそのまま入っちゃダメなんだ。

フン、とニコは鼻を鳴らす。

ニコが家出したそもその原因は、どうやらニコを右往左往扱き扱う人物のせいだという。

それにひどく辟易していたニコが、ついにはあることがきっかけで堪忍袋の緒が切れ、逃げてきたというわけだそうだ。

……麒麟を扱き扱うって、それにしてもすごいひとだな。

要は、ニコを24時間の奉仕サービスが嫌になったということだよな？

「どうせ我がいても、あやつがちいいつとばかり楽するだけだ。せいぜい苦勞するがいいわ」

食べ終わったニコは、不機嫌、というよりは拗ねている様子で呟き、机に顔を乗せた。

はたと気づいたかのように、あたしにニコは顔を向ける。

「……ところで汝は何ゆえ、あのような場所にいたのだ？」

い、今頃ですか？

んー……何て話せばいいのやら。

トイレし終わったら砂漠でしたーとか……笑えない冗談だよ、ほんと。

済ませた後で心からよかったとか考えているあたり、人としてギリギリだと思われる。

一番格好悪いトリップの仕方だというのは変わりがなくかもしれないけれど。

……。

えーっと、

「嘘は騙<sup>かた</sup>るなよ、人間。その気になれば、汝<sup>うぬ</sup>ですら気づかんことでも容易く見抜けるぞ」

こわい。

一息つき喋る前に、ニコはぎろりと、あたしを睨む。

……はい。人間、素直が一番ですよね。

冷や汗。

思えばリ्यूオー以外の人？に、ちゃんと話したことがないかもしれない。

過去を思い出しながら、あたしはニコに正直に話すのだった。



## 発見

今までの出来事を順に、あたしは話した。

ニコは茶々を入れることなく、相槌を打ち黙って聞く……というより、あたしの話を耳に入れながら何か考え込んでいる様子だった。

「ふむ、妙だな……」

しばらく経ってから、ニコの第一声がこれだった。

それから当事者のあたしをよそに、またぶつぶつと独り言を呟く。

その独り言は、ニコの名前のときのように、声がぼやけ聞き取りにくくなっているために、何を話しているのか内容がわからない。

近くのニコより遠くの、隣の机に座っている2人の会話の方がまだ聞こえる。

親戚の娘がどうやら結婚するらしく、彼の友人が嘆いているという話を笑いながら話し合っていた。

どんまい、友人。

「……まあ、我があれこれ思案しても無駄だろう。おい、もうそろそろ出るぞ」

ようやく見切りをつけたのか、ニコは半ばあきらめいた溜め息をついて店員さんに声をかける。

無礼にも隣の話に耳を立てていたために出遅れ、あたしは慌ててニコの後を追った。

気づけば支払済みになっていて不思議だった。

どうやってその4足でお金出して払えたんだろうか。

料亭の外を出て、街を歩く。

黄土色がかった白い土づくりでできている平屋の建物が多いその街は、人が多く活気づいていた。

だんだんと人が混む中で、やがて噴水を中心とした造りでできている大きな広場を目のあたりにする。

砂漠はサボテンいっぱい、オアシスにある植物はヤシの木一本なんていう、ひどいイメージがあっただけに、緑多い植物があるなんて驚くばかりだ。

噴水広場と整備された道以外は、草が生え円を描くかのように樹木がある。

それを横目に、ニコは人だかりの多い道に行く。

もしかしてわざとそうしてる？

「あ、あの……」

「……お前等は大変な目に巻き込まれているが」

あ。

“汝”<sup>うぬ</sup>から“お前”になつてゐる。

なんでだか格上げされた気分になつて、それでも嬉しいのは、何故だ。

ニコの声は、雑踏にまぎれているため、あまり聞こえなかった。

ニコの名前のときや、さっきの独り言よりは聞こえるけれど。

それでも聞きづらいというのは変わりなく、ニコの近くに寄つて話を聞いた。

「乗り越え受け入れろ、とは言わん。全ては流れのまま身を任せよ」

我の恩恵も少しはくれてやろうと、寄つた顔が頬に近づいた。

ほ、ほっぺちゅー？

慰められたってことかな。

あんなセリフだけど、女の子のような声と桜色をしたたてがみの白い麒麟さんなんだ。

「お、見つけた」

こんなかわいい麒麟さんを扱き扱うニコが仕える人の気がしれないよーますます、かわいい。

そう思っていたところで、この世界の街に似つかわしくない服装の男が、ニコを見てこう言った。

街の人たちは、ゆったりとした服装但至少でも日に当たらないようにするためか布を体を覆っている。

それに対し男は、前の世界が似合うような中華風な着物で、布が薄く豪華そうな服装だった。

知り合い？

男に気づいたニコは、不愉快といわんばかりに苦々しい顔をしていた。

## 発見（後書き）

……色々、もどかしく感じます。  
ええ、色々と。

## 対 面（前書き）

今日中には今日中なのですが、これはひどい。

まさかこんなギリギリに更新するとは思いませんでした……。

## 対面

只今、現在。

細身で筋肉質な男と、麒麟さんことニコが公衆の面前で喧嘩をしております。

……恥ずかしくないのかなあ。

喧嘩の始め、ボクシングなどで使うゴングが、鳴ったような気がしたのは空耳だと思いたい。

ニコは舌打ちをする。

「貴様、何故、ここにきた!！」

「迎えに決まっているだろ？ 詫びがほしいなら、いくらでも詫びる。戻れ」

男は、表情なく言った。

男が何を考えているのか、あたしにはわからない。

ただかつてないほどの威圧を感じて、二人の会話を止めるのも憚りはばかねた。

ニコは、その下にいたというのだから、おくびにもださず平然とした様子。

……男もすごいと思うけど、ニコもすごい思った。

「ここでも命令するのか。詫びなど結構だ、それにしばらく我は暇をもらう。手紙にも書いたであろうが」

「……机に放り出されたあの落書きのことか？どう理解しろと」

「貴様！ 我が、まがりなりにも、一生懸命、書いた文字を、愚弄するとは、何事だ！！」

「事実だ、現に周りは誰一人解からなかったぞ。誰一人、な」

「強調するな！！」

辛辣ッ！！

男が話す言葉を、一言で表すならこれだろう。

きつい。

他人事<sup>ひたひた</sup>だけど、泣きたくなった。

だけど男の言葉より何より、疑問に思うことが一つ。

……その4足で、どうやってニコは文字を書いたと。

男とニコのやりとりをしばらく聞いていると、なんだか子供が大人に食いかかっているような感じだった。



兄と妹の喧嘩のようだと思い、微笑ましく感じる。

「ああ、こんな男よりハナがよかった。ハナであれば、我を優しく  
労り、おやつも充実していたというのに」

「お前……結局、それが。そもそも家出の原因もこれだと思つと、  
呆れて溜め息がでる」

「うつうつるさい!! こおひいぜりいの怨みは末恐ろしいぞ!!」

……ん？

今、コーヒーズリーって言った??

この世界に、コーヒーズリーがあつたのか。

いやいやそれにしてもニコの家出原因って……。

「下らんの一言に尽きるだろう?」

男は、あたしを見て言った。

よ、読まれてる?

……いえいえ違いますよ何も思っていないですよ。

思つてませんから!

## 少年

ニコはコーヒゼリーについて、熱心に、まくしたててしゃべる。

「あれは我が、シュシンに頼みこんでようやく手に入れた代物だというのに…… たつぷりのくりいむとやらと共に、ぐちゃぐちゃにつぶし、苺と一緒に食べるのが、私の楽しみだったというのに…… それを貴様!!」

「あれは何もせずそのまま味わうのがいいんだろう、子供が粹がるな」

「シュシンもそうやって召し上がっているのだ、我は子供ではない！ 苺を持つてくるまでに何も、全て食べることはないだろう!? 落ち転がった苺が、あれほどまでに虚<sup>むな</sup>しいとは感じなかったか!!」

「もったいないことをしたもんだとは思ったが」

「ええい黙れだまれえ!!」

「……不意打ちの、それも食べ物に関しての出来事は、腹が立つもんなあ。

買いためていたお菓子を知らない間に、兄に食べられたことが何度かあるため、気持ちにはわからなくはない。

それから、ここでも思ふことがひとつある。

……だからその4足で、どうやってコーヒゼリーをぐちゃぐちゃ

に潰したと。

くち……くちなの？

口で道具を使って、手紙を書いたりゼリーをつぶしていたりしていたの？？

ニコについて、あたしの頭はクエスチョンマークでいっぱいだった。そんなあたしのことはさておき。

ニコはなおもコーヒーズリーという食べ物が、いかに素晴らしいかを語る。

男はうんざりした表情で、深く、それも長く、溜め息をついた。

「はあ……気が滅入る」

「ならば帰るがよい、わざわざここまで来てご足労かけたな」

「そう言うんなら戻れ、上の命令だ」

「フン、少なくともシュシンは我の家出に賛成したぞ？ 誰も文句は言つまい」

どこか得意げのニコを見て、男は何かを察して、シュシンさんに八つ当たりするような言葉をばやいた。

ニコは渋い表情を浮かべる。

「おい。シュシンを侮辱するなよ、シュシンは我を思ってたな」

「いや、これ幸いと大方仕事を怠けたいがためだろうよ。はあ……相解かった、そのコーヒーゼリーとやらを手に入れば戻るのか」

「それでは気が済まん、我がたくさんの好きな菓子を存分に堪能するまでは」

「……調子に乗るなよ？ x x x」

ニコに妥協しようと諦めたような表情の男は、ニコを睨み凄みを利かせた。

……怖い顔。

最後は何を言ったのか、わからなかったけれど。

男の言葉を聞いたニコは、そして即座に謝った。

……終わりを告げるゴングが、鳴った気がした。

「花姫！」

ちょうどそのとき、誰かが呼ぶ声がした。

中性的な、その声が聞こえた方向のあたりを見渡し、その主を探す。

「花姫！！」

顔がやけに整った少年だった。

暑いし走ったからというのあつてか汗ばんでいる。

その少年が、あたしを呼び、そして服を掴む。

「え、リ्यूオー？」

誰かは、なんとなくわかっていた。

けれどリ्यूオーだなんて信じられなかった。

今までのリ्यूオーより、ずっと幼い。

少年のリ्यूオーに驚いたというのもあり、思わず問いかける。

同時に、光が見えた。

2度目の世界でなった、アクマのときとは違う光。

丸く淡い緑色の小さな光が、あたしを包む。

ああ、またトリップか。

「……なんとまあ、酷なことをする」

ぼつりと呟く男の言葉は、今のあたしには聞こえない。

ただあたしは、リ्यूオーを見ているだけ。

「花姫、身内が迷惑をかけた……また会おう」

男……結局名前はわからなかった……の聲がそう聞こえた瞬間。

あたしの世界は、黒くぬりつぶされる。

また会おうって、どういふことだろう？

## 少年（後書き）

今回長めですみません。

本来であれば『対 面』と、この話を一つの話にするつもりだったのですが……うまくいきませんでした（^ ^ ;）

## 風呂場

4度目のトリップは4時間強。

長く見積もってもせいぜい半日だったことだろうと思う。

リユーオーに会って、2、3分といったところか。

こういうこともあるんだなあ、と慣れた自分がいて怖い。

次で終わることを祈るけれど。

リユーオーは8回もトリップしたと言っているのだから、あたしも8度体験することになるんだろう。

元に戻る日はいつ？

……そういえば結局あの、男の名前はわからなかった。

また会ってどういう……

もしかしてあの男が黒幕とか……

ぐだぐだと、長く考え悩む。

そんな暇があるほど、しばらく暗い闇の中に、あたしはいた。

海のような、広く深い水の中にいる感覚。



ふよふよとただよう、あたし。

ここは、なんとなく寂しいところだと思った。

やがて浮き上がる感覚がした。

そして、気づけば風呂の中だった。

なぜだ

案の定、服はびしょびしょに濡れている。

さっきまで乾いているような感じだったような気がしたけれど……  
え、今まで本当に水につかっていたの？

いやいや水に浸かっていたとか、漂<sup>ただよ</sup>っていた感覚はあったけれど、  
あくまでもあれは、暗いが広いところだった！

こんな、狭い、風呂場に沈んでなんかないよ！！

……んん？

それは見慣れた風呂場だった。

定位置に置かれている、姉は気に入っているのに家族に不評のシャ  
ンプーとリンス。

しんぷるいずべすと、な両親が使っている石鹸と、金属で作られた  
ひつじの石鹸台。

香水や体臭が気になるという、妙に鼻が鋭い兄が嫌々使わなければならぬというボディーソープ。

妹の、入浴剤の中に入っているおまけのおもちゃコレクション。

そしてなにより。

あたしの、へちまたわしが!!

……。

ここは、あたしの実家なのでしょうか？

## 風呂場（後書き）

間を開けてしまいました（・ ・ ・）

へちまたわし 最初痛いものですが、だんだん水になじんでくると、  
やわらかいスポンジになり泡がたくさんあつていいんですよ、泡が。

## 兄姉妹

5度目のトリップをむかえて、今のあたしは4度目は半日？ということもあり3度目の世界の衣装を着ている。

上半身は浴衣。

帯は子供用のシワ加工されているような長い布で、花や色とりどりのひもで装飾してあるものだ。

それから下はチャイナドレスのようなきれこみがあり、ブルマー？のような短パンをはいているという格好。

その土地は、基本的に原色が好まれる文化のようで、和服とチャイナドレスをかけあわせたその服は赤い色だった。

それだから。

浴室の扉が開いて、思わずびくりと体が震えた。

「……何やってんの？ハナちゃん」

吹雪お姉ちゃんふぶきが怪訝な顔をして、あたしを見ているのは、仕方がないかもしれない。

「んー……コスプレ、なのかな？ でもねハナちゃんいくらイベントが1年に1回あるかないかの田舎だからって一人遊びした挙句に、お風呂に飛び込むことはないと思うの」

姉の言葉を聞いて、色々言いたいことがあったけれど。

それを言う前に、タオルと服を用意してくると言い残して姉は出ていった。

昨日の残り湯だろう、お風呂の中は水いっぱい。

寒いし、水に濡れた服は重いし……なんかだるいし。

溜め息をついた後、のろのろと服を脱いだ。

洗濯の仕方が、まるでわからない。

綿100パーセントかな、これ??

うんうん唸っていると兄、宵星こほしほしと、ぱったり出くわす。

……ちなみにあたし裸ですが、兄は平気な様子で。

「ああ、ごめん」

「……お、お姉ちゃんは?」

「お前、今それ言うことがボケ」

ぴしゃりとドアが勢いよく閉められた。

……兄は平気なフリだった様子で。

こっちも平然としなくちゃいけないのかなあと思ったけれど、お互

い気まずかつたらしい。

扉越しから、どたどたと勢いよくリビングあたりに行こうとする音と話が聞こえる。

『お兄ちゃん、顔赤いけど』

『うっさい何もない』

『もしかして』

『違う、見てないから』

『……まだ何も言っていないんだけどー？』

そんな言葉と共に洗面所の扉が開かれた。

妹の百々季ももきが、にやにやしながらタオルと下着、服を持ってきてくれた。

「はいこれ、吹雪ちゃんに頼まれたやつ」

「ど、どうも……何？」

「いんや〜？じゃあ、まっただねー」

妹が出ていくと、ふんふん鼻歌が聞こえてくる。

なつかしい、調子っぱずれのアニソンだった。

## 兄姉妹（後書き）

いつも見ていただきましてありがとうございます！

それからお気に入り登録していただきまして、至極恐悦です。

思いのほか進まないのですが、これからも宜しくお願いします！

## 日常

異世界を転々としていて1年以上は経過していると思う。

それなのに兄妹があまりにも、いつもどおりだった。

トリップした前後の時間は、あまり経ってないということ??

わからないけど、その日だったならいいかということにする。

着替え終わり、さんざん悩んだ結果、あの衣装を洗濯機に入れることにした。

洗濯コースを“手造り”にして、スイッチを入れる。

……クリーニングの方がよかっただろうか？

まあどうせ着ないし、何かまずいことあっても大丈夫でしょう、うん。

リビングに行くと、ソファに座っている兄が拳動不審だった。

案の定、妹はにやにや笑っている。

……。

「お兄ちゃん」

「な、何だよ？」



「キヤーエツチーヘンターイ」

「おおおま、ふ、ふざけんなよ!？」

からかうつもりで棒読みで言ったら、動揺した兄の反撃がきた。

ほっぺをつねるなんて痛い。

そのあと本人は裸締め……後ろから首を絞める。

軽くしているつもりなんだろうけど、苦しい。

妹はついに大笑いして腹を抱え、ばしばしと床を叩いていた。

何この兄妹、ひどい。

「はい、そこまでねー夕食だよー」

のほほんとした声で、姉が兄を止めた。

「適当に分けてってねー」

テーブルに、どどんと置かれたフライパン。

鍋敷きの代わりに新聞がフライパンの下に敷いてあった。

中身は大量の焼きそば。

一品料理は、のんびり屋で面倒くさがりの姉が得意とする物で、も

はや定番となっている。

「あたしはいいや……友達と食べてきたし、ごめん」

久しぶりの姉の料理。

だけれど、4度目の世界ですでにニコと……あのときは昼食だったけれど、食べたばかりで満腹だった。

本当のこと話しても、どうせ信じないことだろうと思つし……うん。母と姉は素敵な夢を見たのねと喜ぶだけで、あとは無言か怪訝な目で見られること請け合い。

「そう……？じゃあ、しょー食べてよ」

「……へいへーい、そーいやアイツどうした？」

「りゅーくんなら部屋にいるよー」

んん？

りゅーくん？？

三人だけがわかる言葉が何なのか、わからなかった。

## 二階奥

「あ、りゅータ食食べてないよね？」

しょーとは、兄の宵星<sup>こはりほし</sup>のことだとわかるけど。

姉が何を？というか誰を？言っているのかわからず、あたしはその言葉を問いかける。

「りゅーくん？」

「？　じゃあ、ハナちゃん呼んできてくれるの？」

なんでそうなったとか、どこにいるのとか、なんていう疑問はともかく。

姉じゃ埒が明かないと思い、兄を見た。

「りゅーくん？」

「ああ、お前鞆忘れたんだって？　置けばいいのにアイツわざわざ持ってきてくれてさ。あとで礼言えよー？」

ち　　が　　う　　！！

鞆が何の事だかわからないし、そもそも誰なのかわからないし。  
妹を見た。

憐れんでいるその目は、何だろう。

「花姫ちゃん……ひどい」

「何が？」

「いくら、りゅーくんがおかしいひとだからって存在自体忘れなくてもいいじゃない……」

ひとをおかしいだなんていう、妹が一番ひどいと思う。

誰がわからないまま、とりあえず“りゅーくん”が2階の部屋にいるということで、行ってみる。

“りゅー”って時点で、まさかと思うけど……。

2階を上って驚いた。

元々奥は壁だったのに、扉がある。

戸惑いつつ警戒。

兄、姉と自分の3つの部屋を確認。

わかっていただけないなかった、恐る恐る奥の扉をノックする。

緊張。

『はい？』

「ゆ、夕食です」

『わかりました』

扉が開かれた。

……ああ、やっぱり。

やっぱり、リ्यूオーだ。

目を見開いた後、リ्यूオーはにっこり笑う。

初めて見たときと同じリ्यूオーのようだった。

## 二階奥（後書き）

妹、百々季の部屋は1階にある元書斎っていう、どうでもいい設定があります。

## 廊下

リユーオーの笑顔を見て、頭が痛んだ。

3度目の世界のときのよう、偽の記憶がまた一気に頭を巡る。

変わっているところはリユーオーがいるってことだけで、あとは今までどおりだった。

お盆や正月にときどき会う従兄弟やはどこに、“竜央”としてリユーオーがいりまじっている。

あのお姉ちゃんが優しくしてくれた、同年のとはこと喧嘩した、遊んだなんていう思い出が、ところどころリユーオーになっていた。これが本当なのか嘘なのか、よくわからなくなっていて正直混乱している。

……つまり今のリユーオーは、あたしより2歳上の親戚で、この春大学進学のために居候している……ということになっているわけか。

「今度は、あつさり逢えましたね」

はて、どうということだろう。

少年のときのリユーオーに、さつき会ったばかりだけれど……今度、は？あつさり？？

頭は疑問でいっぱいなあたしに、すかさずリユーオーは答えた。

「……前回2年程いまして、地方に行った先に、あなたに逢いましたから……そう思っただけです」

そして思いだしたかのように、リユーオーは一旦部屋に戻り、持ってきた鞆を、あたしに渡す。

……最初るときまで持っていた鞆だ。

鞆とリユーオーを交互に見る。

最初の世界のときにいたリユーオーが、今ここにいてること？

んん？？

「前の世界で、あなたが置いてきたという鞆を持ってきたのですが……余計なお世話でしたか？」

あたしは首を横に振って、お礼の言葉を何度も言った。

2度と戻ってこないと思っていたから、余計に嬉しく感じる。

ふと、姉の声が聞こえた。

そういえば夕食の用意ができたからって、リユーオーを呼んだんだっけ。

「さて、それじゃあ夕食を食べに行きましょうか？」

「……ごめん、あたし食べてきたばかりだから、いらないの……部



屋にいるって、お姉ちゃんに言ってもらってもいい？」

「はい、わかりました」

リユーオーに敬語じゃないのは、あたしに近い歳というのと、よくわからない記憶が、そうさせているためだ。

リユーオーじゃない誰かとの思い出だとわかっているはずなのに、彼との思い出だと何故か、納得している自分もいる。

思わず彼を引きとめ、慣れ親しんだ家族や友達と同じように話をし  
てしまい、それに気づいて、タメ口だったことを謝る。

リユーオーはきょとんした顔をした。

「ちゃんと会話をしたのは1度きりですが……そのときあなたは、  
素のままに話してましたよ？」

小首を傾げ、微笑んだ。

……ああ、そうか。

「そうだね、夕食、引きとめてごめんね」

「いえ、お気になさらず……では失礼します」

リユーオーの言葉に気付いた。

ちゃんと会話したのは、2度目の世界以来だ。

今より随分と大人のリ्यूオーと。

時代錯誤。ならぬ、人物？または世界錯誤。

今より前の、過去の彼と、逢ってはいても会話した記憶はない。

リ्यूオーが言う、その“一度きり”は……あたしにとって、未来の話？

近いうちにまたトリップするかもしれない。

そんな、まだわからないことに、あたしは恐怖を覚えた。

## 廊 下（後書き）

拙い文章に、見ていただきありがとうございます。

無駄にシリアスにしようとしたり、長くしようとしたりで、今回5度目の世界は更新が滞り気味……。

元々住んでいた世界の主人公には申し訳ないですが、早く抜け出したいと思っているのですが……主人公、嫌々で行きたくないようです。

泣き顔が、見たいのに……

ではでは、次回も宜しくお願いします。

## 正座

不安は残るけれど、ひとまず“流れのまま”に。

久しぶりに、自分の部屋にきた。

トリップ前後の時間はそんなに経っていないため、周りからすれば、毎日ここで寝ているんだから何を言っているのか、と思うだろう。

けれど本当に……それこそ一年半ぶりの、自分の部屋だ。

感傷に浸る。

しみじみって、こういうことをいうのかもしれない。

鞆の中身を確認。

使えなかった携帯電話を、さっそく見てみた。

……よし、使える。

今思えば、この世界の時間が止まっていたらなんじゃ？と思う。

あくまで思うただけだけ。

待ち受け画面は他人ひとからマイナーだと言われているキャラクター。

日付と時刻を見てみて、今日が金曜日でよかったと心の底から思う。

ゆっくり休むことができるんだ……。

安心して横になる。だらだら。ぐだぐだ。

……あれ、なんか忘れている？

1階から母が、あたしを呼ぶ声が聞こえてくる。

「はあーい？」

「ちょっときてー」

1階に降りて、母がいる……リビングに向かう。

何で妹は、正座をさせられているんだろう。

姉はおろおろとうろたえ、兄とリユーオーは我関せずといわんばかりに平然と夕食を食べている。

帰ってきたのだろう父は、にこにこ笑って母の隣にいた。

父の笑顔と母の機嫌が悪そうな顔の、表情の差が余計に怖い。

「……………何？」

「いいから、あんたも正座して」

「何で？」

「いいから」

「な」

「座れえ！」

母は質問に答えてはくれず、すさまじい剣幕で怒鳴りこむ。

何なんだ、まったくもう。

「来週あんた、テストあるって言ってたよね？」

……はい？

「言っただけ？」

「カレンダー」

「……？ あ」

母は壁がけのカレンダーがあるほうを、顎を使って見るように促した。

カレンダーには、テスト期間と、その詳細が書いてある。

まがうことない、あたしの字。

さあ、と顔が青ざめた。

これは！！

「あんたもか！」

すかさず母の怒号。

リユーオーにこんな姿見せてごめんねえと言っているけども、容赦しない。

「テストを忘れるなんてどうかしてるわ！！　だいたい学生の本業ってのはね」

声を荒げて説教が開始される。

妹が忘れやすいつてのは常だからわかる。

けどあたしの場合は1年半超の空白があるんですとは言えず。

母の説教、父のフォローという名のきつい皮肉を、妹と一緒に耐えるしかなかった。

足が痺れたつていうと、足にちよつかいだして、ひどいときは足を踏む親だから、もちろん黙っている。

懐かしさを覚えるけど、これはこれで遠慮したい。

……ええ、そんなわけで。

テスト勉強を、始めねばなりません。

## 正座（後書き）

「反応と、悶えているのが笑える」

足痺れたっていうと、悪戯心からか笑って、ちょっかいだすひと、いますよね……。



変化？

その世界には通用しても、異世界に行けば通用しない。

例えば教科書とノート。

言葉も文字も違うのだから、異世界の文化や、歴史、思想も違う。

その世界にしかないモノ……魔法や怪物といった空想物だと思っていたモノが、そこにある。

それらがある、通用するだなんて教科書は教えてくれないし（当たり前だけれど！）、役に立たなかった。

友達とのやりとりで描いたラクガキを見て、思い出し笑いをするくらいしか使えない。

例えば携帯電話。

家族に連絡をとりたかったけれど、とれなかった。

メールの内容を見て懐かしむ。

イタズラで撮った兄妹たちの、ふざけた画像を見つめる。

そんなことしか、できないまま。

例えば学校指定の制服、体育着。

1度目の世界で、領主のおじさんが保護者ということもあり、あたしは常にドレス着用だった。

淑女はズボンを履かないとか、足がでているヒダスカートはみつともないとか恥ずかしいとかで。

あたしは使えないそれらを鞆に詰め込むしかなかった。

……鞆を持ってきてくれたリ्यूオーに、本当感謝だ。

なかったらと思うと、どうすればよかったんだろう、あたし。

教科書は全てなくしたというわけでないから一部の授業は忘れたで押し通す。

体操着や制服……最悪私服で過ごさなければならなかったというところか。

……それはかなり嫌だな。

ないないなくした！どうしよう！！って、今頃慌ててる頃かもしれない。

土日は兄やリ्यूオー、もしくは姉が庭教師兼見張り役で、妹と、死に物狂いで勉強した。

あまりのバカさ加減に、呆れかえられる。

さすがにリ्यूオーに教えてもらった時は恥ずかしかった。

そして月曜日。

久しぶりの制服は、ちょっときつめ。

太ったという事実になんぞ焦った。

久しぶりの学校は、かなり緊張する。

心臓の鼓動が激しくて、自分の心臓の音が聞こえるほど。

友達におはようというのが、なんとなく気恥ずかしい。

今まで先生に、どう接していただろう？

授業がつまらないと思っていたけれど、こんな面白かったわけ？

テレビの話や流行の話についていけなかったけど、友達と冗談を言い合うのは、楽しいと思う。

いちいち感激しているあたしに、何か変だと思ったらしい。

平常心を保っていたようだったけれど、周囲にはバレバレのようで、友達の一人が、休日何かあったのかと聞いてきた。

どう言えいいかわからないけど（正直に言っても夢だとか妄想だとか言われるだけだと思う）、何もないと言うほうが無難だと思ってそう言った。

「ウソ、だって顔が変わった」

「なんかフニキ変わったよね」

「大人っぽくなったかんじ」

……彼女たちが言った言葉は何気ない一言だったかもしれない。

けれど突き刺さるように痛かった、実際友達より最悪（早生まれの友達と、あたしの年の差で）2年は年上だから。

変わったらしいあたしを見て、彼女たちはカレシができたんじゃないかどうかで盛り上がる。

……鞆の中身は確かに全部使えたけれど。

元々住んでいた世界だけれど、何かが違う。

居心地悪くて、違和感を感じた。

元に戻った、帰れたことは、嬉しいはずなのに。

なんとなく、あたし一人と世界、線引きされたような気がした。

## 父親

勉強は、友達のあの話から、もうやる気がなくなった。

否定したいけれど、わかっている。

リ्यूオーが8回トリップするたびに、あたしに逢ったというのだから、またトリップするだろう。

勉強したとしても、無駄なんじゃないだろうか。

そこに何の意味がある？

トリップして、その後はどうなるんだろう。

また、ここの世界の時間は止まったまま？

今度帰ってきたときどうなるんだろう。

浦島太郎みたいになったとして、帰るまでその間、家族は、いなくなつたあたしをどう思ふんだろうか。

考えたら、きりが無い。

不安だらけ。うつうつ。

部屋に引きこもっているとノックの音が聞こえ、珍しく父が声をかけてきたようだった。

何の用か尋ねた。

父はあたしの部屋に入ってもいいかと聞いたけれど、それはどうやら父の中で決定のようで、返事する間もなく入る。

勉強机用のキャスター付き椅子を、父はベット側に寄せて座ると、あたしにベットに座るよう促した。

しばらく黙ったままの状態で、気まずかった。

父は、おもむろに口を開く。

「ここ数日、拳動不審だね」

「普通なんだけれど……そんなに変だった？」

父の目を見る。

相変わらず何を考えているかわからないその表情は、しかし優しいと感じる。

「変だった、珍しくヨリが心配してたから」

「お母さんに？ うわ、相当だね」

「僕は面白かったけれど、ヨリが見てられないって」

「……だから、お父さんの出番だってこと？」

「そういうこと」

あたしの様子を見た、父の感想について、あえて何も言わない。

口うるさいけれど真面目な母が、普段物をあまり言わない父に、よくからかわれたというのは聞かされている。

兄は父に似たと、兄が何かするたびに母は言う。もはや母の口癖だった。

父は、言うだけ言って黙る。

「何か、話をするように、促されている気分、なんだけれど……」

「だったら話せばいい。キミがいてほしくないと言つまで、ここにすることはゆずれないよ」

別にあつち行つて！というほどではないけれど、気まずいのは確かだ。

黙っているあたしをよそに、しばらくかかるかなあとやって父は本棚に行った。

敷きつめられていた本にある書かれていた背文字を眺める。

……本当に居座る気だ、このひと。

というか少女マンガ読むのか、真っ先に純文学を選ぶと思ったけれど……似合わない。

思わず笑った。

「何で途中から？」

「家にある本という本は読む性分だからね」

今まで勝手に読んでいたということ……？

ちよつと腹が立った。

「この、活字中毒」

「本の虫と呼んでいただけでは、更に光栄だね」

あたしの悪態に、さらりと受け流した父は、マンガを読み始める。

大人の展開になっているマンガであれば読まないように止めていた  
だろうけれど、恋愛よりも人間成長重視な物語のためにそこは安心  
して親に見せられる。

まず、父親が少女マンガを読むということは、ないはずなのだけ  
れど。

変な光景。

……。

「お父さんはさ」

「ん？」



「もし、あたしが、いなくなったらどうする？」

気づけば、こんなことを質問した。

父は本を閉じ顔をあげて、あたしを見る。

そういえば、父が読んでいた少女マンガの主人公は家出したんだっけ？

……好きな、ひとのために。

あたしの場合は、何のためにトリップしてるんだろう？

「今？」

「たぶん、今」

父は、顔をしかめて黙っていた。

考え込んでいるからか、読んだページにしおりがわりに指を挟み持ちながら、腕を組む。

癖付くから本棚行つて元の場所に戻せ、と言いたかったけれど黙った。

真剣な父を、あまり見たことはなかった。

「……君を探すかな？ うん、将来で嘆くならキミが納得いくまで付き合う、恋愛沙汰であれば男を殴る。事件に巻き込まれたのであれば……どうするかわからないけど、これが僕にとって一番怖い」

「そこまで考えつく？」

「親とは、そういうものだよ」

「……探しても、見つからなかったら？」

「成人になった頃には僕はあきらめる。 無事だろうって思う事にする」

「潔いっていうんだか、薄情っていうんだか」

「子供は巢立つものだろう？ 僕なんか滅多に両親に連絡を入れないから……どっちが薄情かって思うよ」

「ああ、だからお祖母ちゃん」

「いやあれはキミたちの声が聴きたいだけだと思うけど」

可愛くない息子だったと、キミたちを見て会ったび言うからね、あのひとは。

ときどきかかってくるお祖母ちゃんの電話を思い出しながら呟くと、父は苦笑した。

母の声が聞こえる。

ああ、もうすぐご飯か。

「さてと行きますか」

「うん」

部屋の扉を開けると、いい匂いがしてきた。

今日はハンバーグのようだ、ソース独特の匂いが辺りをただよう。

階段を下りる、父の背中を見てふと泣きたくなった。

ヨリが作るなんて珍しいねと関係ないことをしゃべる父は、笑って頭を撫でる。

いつまでもずっと。

ずっとこの世界にいたかった。

## 穴と声

リユーオーと逢って1週間も、彼はいなかったと思う。

いつのまにか消えるようにいなくなっていた。

2階奥の扉もなくなり、家族にたずねても、誰のことだと逆に問いかけられる。

……あたしときも、そうなのだろうか。

寂しいと思うけれど、家族に心配させるよりは、それはそれでいいのかもしれないと思った。

最後の日の夕方、また二人きりになったことがある。

挨拶を交わして雑談。

ふと、こんな話になった。

「花姫は温かい家族をもって、幸せですね」

それを聞いて面映ゆい気持ちになる。

そんなことはないと否定しつつ、けれど妙に照れくさく感じた。

話を変えようと、そういえばともいうように、あたしは言った。

「リユーオーの家族は違うの？」

冷たい笑みを浮かべて、リユーオーは答える。

「他人のほうが、少なくとも優しくかったんじゃないでしょうか」

淡々と話すリユーオーに、どう、返事したらわからない。

ごめんというのも変だし、取り繕っても墓穴を掘るだけだと思ったから、しばらく黙ることしかできなかった。

リユーオーは苦笑して、急に明るい話題をふったけれど、あの冷たい笑みは忘れそうにない。

リユーオーがいなくなつて1週間。

リビングの壁で、ひとつの小さなしみが少し気になつたけれど、深く考えることはなく1日を過ごす。

日に日に大きくなっていく、黒いしみ。

同時に声が聞こえる。

最初はかすかに聞こえる程度だった。

けれど、しみは大きくなると共に声もはっきりとした口調になる。

子供の声だ。

独特の高い声は、かわいいと思うけれど、かえってそれがより一層怖く感じる。

誰も声はおるか、もはや穴となりつつあるしみさえ気づかなかった。声も穴も、あたし以外誰も指摘することなく気づかない。

リビングに行くたびに大きくなっていて憂鬱だった。

ひどい恐怖体験。

『きて、早くここにきて、ごめんね、もう、そこにはいられないの』何を言っているか、わかってはいる。

わかってはいたけれど、その言葉を見殺し続けていた。

1ヶ月経った頃、母がテストの点数結果が全部わかる頃だろうと催促してきた。

全体的に平均点で苦手な分野は赤点ギリギリという、散々な結果に呆れた表情を浮かべる。

ちなみに妹の点数はよかつたらしく、スナックを食べながら、呑気にテレビのバラエティ番組を見ている。

中堅芸人にいじられた若手芸人の、少し情けない姿に笑っていた。

……要領いい妹が羨ましい。

「聞いているの、花姫？」

母の声が荒くなった、同時に風がどこからともなく吹いてくる。

風の行きつく先は穴だった。

だんだん風は強くなる。

「やだ、台風？」

「誰？窓閉め忘れたのー？寒いんだけどー」

その場にいた母と妹は、それでも穴に気づくことのない。

『ごめんね、お願い、きて、こないとだめになっちゃう、はやく…  
…いい加減にしろよ』

穴の中の子供の声は、急に男の声へと変わった。

ぼそぼそと声が聞こえた気がしたけれど、はっきりわかるのは男の声。  
声。

『黙っていたけどもううんざりだ、おい、さっさと穴に入れよ』

男の声は、高圧的な態度で、命令する。

従う気は更々ない。

そしてまた一段と低くなった声で、穴は言う。

『従う気がないなら、従わせるまでだ』

「……花姫、どうした」

いつのまにか家族全員そろっていたことに驚いた。

不思議そうに、みんな、あたしを見る。

風はさらに強くなり、あたしを吸いこもうとしていた。

……ブラックホールってこんな感じなのかな？

呑気にそう思った。

「ばいばい」

また会えたらいいね。

この世界に、あたしは別れを告げる。



## 雨

どさりと落ちた先は、荒野。

天気は集中豪雨、早くも服がびしょ濡れる。

でもそんなの気にしなかった。

自分の気持ちでいっぱいだった。

こんなにもあっけない別れ方をするとは、思わなかった。

あの声は、誰なんだろう。

ダメになるって、あたしがいた世界にいられないって、あれが最後なのだろうか。

いや最後のようだった。

いつもだったら……この時点であきらめ慣れてる自分が嫌だった……、急に世界が変わるはずなのに。

どうして今回に限って、強制とはいえ、自ら赴くようにしたのか。

……異世界に行くのだろうとわかるモノに、どうしてあたしが行くと思ったのか。

わからないものが多すぎて、もうどうでもよかった。

友達や家族との思い出が、よみがえる。

1ヶ月過ごした思い出と。

今まで覚えているかぎりの、出来事と。

恥ずかしいことも、怒ったことも、悲しかったことも。

嫌な思い出のはずなのに、すべてが思い出のようだった。

もう、帰れない。

帰ることが、できないかもしれない。

帰れないんだ。

笑いあう友達。

笑いあう家族。

もう会うこともないのか。

声をだして思い切り叫んだ。

どうにもならないのに、その場であたしは嘆く。

冷たい雨とともに頬を伝い流れ落ちるものは、何故こうも温かいのか。

涙は、止まらない。



## 俄雨

どれくらい時間が経っただろう。

集中豪雨は、にわか雨となり、涙は枯れたところで人が来た。

テレビ番組で見る時代劇で見るような、赤い和傘を持っている。

こんな、辺鄙<sup>へんび</sup>なところで？

向こうもそう思ったらしい。

あたしに気付くと、走って近づき傘を差し出した。

……姐<sup>あね</sup>さんと呼びたくなるような、勝気な顔つきの女性だった。

「あや、こんなところに若い娘さんが、どうして？ 風邪引くよ！」

傘に合った臙脂色の作務衣を脱ぎ、あたしにかぶせる。

「くっさいけど我慢して。とりあえず、これがタオルがわりね」

においについては、ひどいというわけでもなかったので黙っておく。

むしろＴシャツ一枚となったその女性は寒いだろうに、その親切心  
がありがたい。

彼女は、きつたないところだけ家にご招待するよと言う。

抵抗してみるも遠慮しないでと言って、ぎゅうぎゅう力いっぱい、あたしを抱きしめた。

力が強くて逃げようと思っても、に、逃げられない……っ。

見知らぬ人を、いくら同性とはいえ抱きしめるなんて。

怪しい。

ありえない。

そんな単語が、頭にチラついた。

けれど彼女は、おくびも見せずにアハハと笑うだけだ。

何の歌かはわからないけれど鼻歌交じりで、スキップする。

「それにしてもあなた大概ベタね、元気出して」

女性の言っていることがよくわからないまま、あたしは連れだされた。

彼女の名前は、トウ。

後から聞けば、ここは「恋逃れの山」と呼び名がつくくらい悲恋ものの逸話が多いそうだとかで。

1年に4、5人はフラレタ、もしくはワカレタ理由から、ひとり訪れることがあるという。

あたしも、そういうひとたちと同じと思われていたみたいだった。

トウさんは思い込んだらどうもその考えから突き進むようで、そういう理由で山にいたわけじゃないと真っ先に否定したけれど、聞いてくれなかった。

「いいのいいの。聞かないし、しばらくここにいていいし。でもバカなこと考えちゃだめよ」

はやまっちゃだめよと彼女はそう言って温かいお茶を差し出した。

……何をはやまると？

トウさんの家は山小屋と呼べばいいのか、素朴な小さな家だった。

中は、くしゃくしゃとに丸まった紙と筆がそこらかしこに散らばっており、お世辞にもキレイとは言えない。

色が染みついている小さな皿が、たくさんある。

皿がひっくり返り、こぼれているものもあるけれど。

よほどじろじろと、部屋を眺めていたらしい。

「ん？ 私、絵師よ。驚いた？」

何も言わなかったけれど、彼女は言った。

失礼だったと反省して謝ると、彼女はいいのいいの、と手を振った。

「興味、ある？」

きらりと、彼女の目が光った気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9465s/>

---

一緒にトリップ！

2011年6月5日16時04分発行